

令和 6 年 6 月 17 日現在

機関番号：11401

研究種目：若手研究

研究期間：2020～2023

課題番号：20K12776

研究課題名（和文）思想史的位置づけと基本諸概念の解明をとおしたアンリ・マルディネの哲学の体系的な研究

研究課題名（英文）Systematic study of Henri Maldiney's philosophy through the elucidation of its position in the history of philosophy and its basic concepts

研究代表者

小倉 拓也 (Ogura, Takuya)

秋田大学・教育文化学部・准教授

研究者番号：00739401

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,700,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、フランスの哲学者アンリ・マルディネの哲学を、その思想史的位置づけと基本諸概念の解明をとおして体系的に研究した。思想史的位置づけに関しては、エルヴィン・シュトラウス、ジル・ドゥルーズ、マルク・リシールら同時代の思想史的布置や、独仏現象学の伝統におけるその位置づけ、そしてドイツ観念論等を中心とする哲学史の影響を明らかにした。基本諸概念の解明に関しては、リズム、感覚、風景など、マルディネのキャリアをとおして中心を占める、比較的一般的と言える諸概念の練り上げの内実を明らかにし、そしてそれらをもとづいて、超可能性や超受容性といった、マルディネが創造した独自の概念の意味や用法を明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

マルディネにおけるリズム、感覚、風景などの基本諸概念を、それらが由来しているシュトラウスの精神病理学と、反対にそれらにもとづいて展開されるドゥルーズとガタリのポスト構造主義哲学とからなる具体的文脈のなかで明らかにした。超可能性と超受容性というマルディネのオリジナルの概念を、同時代のリシールの現象学による援用や、やはりドゥルーズとガタリとの密接な影響関係、そしてそれらの背後にあるドイツ観念論の重要性に焦点を当てて明らかにした。これらの成果は、思想史的研究上未踏の哲学者に関する希少なものとして学術的意義が高く、また、日本語の美学の啓蒙書ですでに引用されるなど社会的意義も高い。

研究成果の概要（英文）：This study systematically researched the philosophy of the French philosopher Henri Maldiney through elucidation of its position in the history of philosophy and its basic concepts. Regarding the position, we have clarified its status among the contemporaries, including Erwin Strauss, Gilles Deleuze, and Marc Richir, and in the Franco-German phenomenological tradition, and the influence of German idealism and others on its philosophy. In terms of the basic concepts, we have clarified Maldiney's elaboration of relatively general concepts such as rhythm, sensation, and landscape, which have been essential in his long career, and based on this, we have clarified the significance and usage of his original concepts such as transpossibility and transpassibility.

研究分野：哲学・思想史

キーワード：アンリ・マルディネ エルヴィン・シュトラウス ジル・ドゥルーズ リズム 感覚 風景 超可能性 超受容性

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

アンリ・マルティネは、20世紀から21世紀にかけて活動したフランスの哲学者であり、現象学的人間学の立場から、美学や精神病理学の領域にわたる多くの成果を残した。しかし、初の単著の刊行が61歳のときと遅く、また、ほとんどの著作がスイスの小さな出版社から刊行され、早々に絶版となったこともあり、その存在は、生の哲学、現象学、構造主義、ポスト構造主義などが織りなす、同時代の華やかな思想運動のなかでは、ほとんど注目されずに埋もれていた。

そんななか、フランスを中心にマルティネの評価が徐々に進み、2007年には国際アンリ・マルティネ協会が設立され、2008年からは機関誌 *L'ouvert* が刊行された。早々に絶版となり長らく入手困難な状況にあった主要著作群は、2012年以降、パリの大手 Cerf 社を中心に再刊がなされた。2016年に Minuit 社が刊行する有力量術誌 *Philosophie* がマルティネ特集を組んだこと、そして2017年に初の本格的モノグラフ *Frédéric Jacquet, La transpassibilité et l'événement, Paris, Classiques Garnier, 2017* が刊行されたことは、マルティネ研究の機運の高まりを示す出来事として評価できる。

しかしながら、そのようなフランスにおいても、研究の大半が特定の現象学サークルを中心とする仕事であり、マルティネの哲学そのものの多岐にわたる成果に比して、その関心には偏りがあると言わざるをえず、その体系や全体像に接近する包括的な研究はいまだなされていなかった。また、本邦の当該領域に関する研究という観点でも、マルティネの哲学はほとんど知られておらず、たしかな知見による導入と議論の活性化が急務となっていた。

2. 研究の目的

マルティネの哲学は、その研究の機運の高まりにもかかわらず、いまだ多くの部分が未着手、未解明のままとなっていた。このような学術的背景のもと、次のような基礎的な取り組みが必要と考えられた。すなわち、マルティネの哲学は、現象学内部に限定されない思想史的布置の観点から見た場合、総体としていかなるものであり、またいかなるものでありうるのか。そして、その哲学の現代的な意義は何であり、また何でありうるのか。これらの問いに答えるためには、現在の各論的な研究の段階を一步抜け出し、綿密な思想史的な位置づけと、それにもとづく基本諸概念の内実の正確な理解をとおした、体系的な研究が必要であった。

以上を踏まえ、本研究は、マルティネの哲学を、その思想史的な位置づけの解明と、それにもとづく基本諸概念の内実の解明をとおして、体系的に明らかにすること、そしてその現代的な意義の特定を試みることを目的とした。すでに述べたとおり、マルティネの哲学は、現在フランスを中心に研究の機運が高まっているが、特定の分野、とりわけ現象学研究内部における各論的なものがほとんどで、思想史的な観点からの体系的な研究と、それにもとづく包括的な理解には至っていなかった。本研究はそれを実施する先駆的な試みとなることを目指した。

3. 研究の方法

(1) マルティネの哲学を、その構築に直接的に関与した哲学的系譜（シェリングらドイツ観念論、ハイデガーやメルロ＝ポンティら独仏現象学、ピンスヴァンガーやシュトラウスら精神病理学）と、それだけでなく、マルティネの影響を受けた同時代の理論的展開（ドゥルーズらポスト構造主義、リシールら現代現象学）も含んだ、重層的な思想史的布置のなかに位置づけること。

(2) 以上の思想史的布置における理解にもとづいて、それら諸概念の内実を、その哲学の到達点であり最重概念である「超受容性」の生成過程という観点から、そして、それらが構築され提出される際の十分に説明されない前提となっている、美学や精神病理学などの隣接諸分野の文献や知識をpushさえたうえで、明らかにすること。

4. 研究成果

(1) 2020年度は、1. 抽象的でつかみどころのないマルティネのリズム、感覚、風景の概念を、その形成過程の観点から明らかにするべく、その由来であるシュトラウスの精神病理学の基礎的解明を行った。しばしば引き合いに出されるシュトラウスの主著『感覚の意味について』（1935年）だけでなく、それに先立ち『神経科医』誌に発表されていた「空間的なものの諸形態」（1930年）の空間論を詳細に読み解くことで、光学的空間との対比で特徴づけられる音響的空間、目標指向的運動との対比で特徴づけられる現在時称的運動が、マルティネのリズム、感覚、風景の概

念のプロトタイプとなっていることを明らかにし、論文としてパブリッシュした。2. そうした概念形成史的な理解を、マルディネに後続し、その影響下に展開されたドゥルーズとガタリの『千のプラトー』(1980年)におけるリトルネロ論を含む文脈にまで拡張し、マルディネの議論にもドゥルーズとガタリの議論にも通底するハイデガーの『存在と時間』(1927年)における世界内存在との対峙という論点を組み込みながら、より立体的に深化させる学会発表を行った。また、これら基礎的な作業に加えて、以下の取り組みと成果も得られた。3. ドゥルーズとガタリの芸術哲学を、シュトラウスとマルディネの感覚論との関係を踏まえながら論じる、オーストラリア出身の哲学者エリザベス・グロスの『カオス・領土・芸術』の翻訳を共訳で行い、法政大学出版社から刊行した。

(2) 2021年度は1. 2020年に学会発表した上記マルディネ研究を練り上げ、論文としてパブリッシュした。2. また、マルディネが美術史家リーグルの『末期ローマの美術工芸』(1901年)から着想を得て独自に練り上げている、「触視的」と形容される古代エジプトの形象性に関する理論が、ドゥルーズの絵画論とそのヒステリー概念に重大な影響を与えているということ、ドゥルーズに軸を置き、フロイトにおける古代エジプトの形象性およびヒステリー概念との関係において論じる論文を執筆し、パブリッシュした。これらに加えて、以下の取り組みと成果も得られた。3. マルディネ哲学の精神病理学的な研究と展開に寄与することを期待し、フランスの臨床心理士、精神分析家であるブノワ・ヴェルドンによる老年精神医学、老年心理療法に関する著作『こころの熟成』を共訳で翻訳し、白水社から刊行した。

(3) 2022年度は、1. 本研究の対象となっているマルディネ、ドゥルーズ、ガタリに言及し、リズムやリトルネロといった概念を独自の観点から論じている多賀茂の『概念と生』の合評会で、本研究のこれまでの成果を踏まえて議論を展開する発表を行った。2. 川崎唯史の『メルロ＝ポンティの倫理学』の合評会で、メルロ＝ポンティの『知覚の現象学』(1945年)における統合失調症論とその意義そして射程を、それが依拠しているシュトラウスの主著『感覚の意味について』(1935年)の精神病理学の観点から、そのシュトラウスに依拠しているマルディネの精神病理学も念頭に置きながら、批判的に論じる発表を行った。3. ドゥルーズにおける非人間主義と現象学的人間学の関係、そしてその関係の観点から見たリトルネロ概念の現代的意義を、シュトラウスとマルディネの精神病理学の観点から、さらにヴィクトール・フランクルの主著『医師による魂の治癒』(1952年)の人間主義的な実存分析を批判的な対照軸として設定し、論じる発表を行った。

(4) 2023年度は、1. マルディネのリズム概念について、ドゥルーズとガタリのリトルネロ概念や神経学的音楽療法におけるリズムの問題との関係において、その特徴、意義、課題を論じる発表を行った。2. ドゥルーズにおける実存主義とその背後にあるシェリングの哲学が持つ可能性について、堀千晶の優れたドゥルーズ研究『ドゥルーズ 思考の生態学』の合評会でその成果に応えるかたちで、マルディネがそれらに与えた影響を念頭に論じる発表を行った。3. ドゥルーズとガタリの反精神分析的な思想とリトルネロの哲学を、それらに影響を与えたマルディネの精神病理学とリズムの概念を念頭に論じた。4. リシールの現象学による援用の観点から、マルディネの「超可能性」と「超受容性」、そしてそれらの思想的布置、現代的意義について、後期の主著『人間と狂気を考える』(1991年)の議論を中心に読み解いて論じる発表を行った。5. マルディネの主著『眼差・言葉・空間』(1973年)における「形」の概念が、リュイエルの主著『新目的論』(1952年)の「形」の概念とともに、ドゥルーズとガタリの晩年の自然哲学に「自分で自分を形づくる形」として結実することを論じる論文を執筆した。これは2024年度に共著『21世紀の自然哲学』の一部として刊行されることが決まっている。また、これらに加えて、以下の取り組みと成果も得られた。6. ドゥルーズの芸術哲学におけるマルディネの美術史理解の意義に関する記述を含む、アンヌ・ソヴァニャルグの『ドゥルーズと芸術』の翻訳を完成させた。これは2024年6月現在、刊行済みである。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 小倉拓也	4. 巻 1167
2. 論文標題 ヒステリー的身体の二つの形象性 ドゥルーズとフロイト	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 思想	6. 最初と最後の頁 106-122
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小倉拓也	4. 巻 26
2. 論文標題 眩暈から開放へ アンリ・マルティネのリズムの哲学をめぐって	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 フランス哲学・思想研究	6. 最初と最後の頁 73-84
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小倉拓也	4. 巻 76
2. 論文標題 エルヴィン・シュトラウスにおける空間的なものの諸形態 色と音をめぐって、風景へ向けて	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 秋田大学教育文化学部研究紀要 人文科学・社会科学	6. 最初と最後の頁 69-76
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.20569/00005524	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計11件（うち招待講演 7件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 小倉拓也
2. 発表標題 自閉 の人間学序説
3. 学会等名 リズムの哲学研究会第1回研究会合「神経学的音楽療法とリズムの哲学」
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 小倉拓也
2. 発表標題 無底の行方と穴の身分 ドゥルーズの思考の生態学をめぐる
3. 学会等名 公開研究会『ドゥルーズ 思考の生態学』合評会（招待講演）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 小倉拓也
2. 発表標題 時空の結晶 反エディプスから形 リズムの哲学へ
3. 学会等名 小寺記念精神分析研究財団学際的ワークショップ「精神分析の知のリンクにむけて」第8回「心、身体、時間」（招待講演）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 小倉拓也
2. 発表標題 超可能性と超受容性 マルディネとリシール
3. 学会等名 東北現象学サークル第1回研究大会 シンポジウム「マルク・リシールの現象学」（招待講演）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Takuya Ogura
2. 発表標題 The Canaries That Live Today: Toward A Post-structuralist Psychopathology of Autism
3. 学会等名 The 2nd Akita Philosophy Seminar
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 小倉拓也
2. 発表標題 別の生と此の生 『概念と生』をめぐって
3. 学会等名 多賀茂 『概念と生 ドゥルーズからアガンベンまで』合評会（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 小倉拓也
2. 発表標題 契約破棄 メルロ＝ポンティの倫理学に寄せて
3. 学会等名 川崎唯史 『メルロ＝ポンティの倫理学 誕生・自由・責任』合評会（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Takuya Ogura
2. 発表標題 The Nonhuman Becoming of Man: Deleuze and Phenomenological Anthropology
3. 学会等名 The 1st Akita Philosophy Seminar（国際学会）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 小倉拓也
2. 発表標題 現前と俯瞰
3. 学会等名 檜垣立哉教授大阪大学最終年度記念シンポジウム
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 小倉拓也
2. 発表標題 此岸の地獄、現世の救済 ドゥルーズの法思想に寄せて
3. 学会等名 三田哲学会シンポジウム「ドゥルーズと法の問題 批判と想像」(招待講演)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 小倉拓也
2. 発表標題 眩暈から開放へ アンリ・マルティネのリズムの哲学をめぐって
3. 学会等名 日仏哲学会2020年春季・秋季合同大会(招待講演)
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計5件

1. 著者名 ブノワ・ベルドン、堀川 聡司、小倉 拓也、阿部 又一郎	4. 発行年 2021年
2. 出版社 白水社	5. 総ページ数 175
3. 書名 こころの熟成 老いの精神分析	

1. 著者名 エリザベス・グロス、檜垣立哉、小倉拓也、佐古仁志、瀧本裕美子	4. 発行年 2020年
2. 出版社 法政大学出版局	5. 総ページ数 199
3. 書名 カオス・領土・芸術 ドゥルーズと大地のフレーミング	

1. 著者名 小倉拓也、ほか	4. 発行年 2023年
2. 出版社 障害の家と自由な身体 リハビリとアートを巡る7つの対話	5. 総ページ数 252
3. 書名 障害の家と自由な身体 リハビリとアートを巡る7つの対話	

1. 著者名 アンヌ・ソヴァニャルグ、小倉拓也、黒木秀房、福尾匠	4. 発行年 2024年
2. 出版社 月曜社	5. 総ページ数 392
3. 書名 ドゥルーズと芸術	

1. 著者名 小倉拓也、ほか	4. 発行年 2024年
2. 出版社 人文書院	5. 総ページ数 384
3. 書名 21世紀の自然哲学へ	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------